

〈書評〉 遠藤泰生・木村秀雄 編  
『クレオールのかたち—カリブ地域文化研究—』

(東京大学出版会、2002年5月)  
定価(本体価格4400円+税)

鈴木 茂

はじめに

この10年余り、わが国において、カリブ地域は、歴史学のみならず、文学や人類学や社会学、さらにこうした既存の学問領域の批判や相対化をめざす、さまざまな潮流の批評理論によって大きな注目を浴びてきた。そして、カリブ地域を語る時、必ずといって良いほど持ち出されるテーマが「クレオール」である。「クレオール」と「カリブ」、一見すると自明に思われるこの取り合わせには、どんな意表をつく仕掛けが仕込まれているのだろうか。総勢10人の執筆分担者のうち、その大半がカリブ地域を専門の研究対象とはしていない本書にあってはなおさら、どんな「クレオールのかたち」や「カリブ」が登場するのか、興味をそそられる一書である。

1. クレオールの「かたち」と多義性

本書は、「クレオールのかたちを求めて」と題された序(遠藤泰生)に続いて、4部10章から構成されている。その表題と執筆者を示すと次のとおりである。

I クレオールの現場

- 第1章 異民族、異文化共生の理念を拒むクレオール—ジャマイカ・マルーンの歴史に見る包摂と拒絶(遠藤泰生)  
第2章 ポストコロニアル・プエルトリコ—1998年住民投票をめぐる考察(阿部小涼)

II 外延のクレオール

- 第3章 熱帯林のクレオール—ボリビア低地のイエズス会教会(木村秀雄)  
第4章 ペルーの黒人とクリオーリョ(ヘスス・ワシントン・ロサス・アルバレス)  
第5章 都市景観にみるクレオール文化とミドルクラス(高橋均)

III 俯瞰されるクレオール

- 第6章 カリブの人喰い人種—食人言説と相対性(足立信彦)  
第7章 普遍性への途上—クレオールとフランス共和制(増田一夫)

## IV クレオールへの回帰

第8章 ジャマイカ・キンケイドの『小さな場所』第1章を教えることについて（柴田元幸）

第9章 デレク・ウォルコットの詩におけるクレオール言語（ローレンス・ブライナー）

第10章 カリブにおけるクレオール化の一例—ジャックリーヌ・マニコムのエコフェミニズム（メアリ・アン・ゴッサー・エスキリン）

本書の表題にある「クレオールのかたち」とは、どういうことであろうか。編者の遠藤泰生氏は、「序 クレオールのかたちを求めて」で、本書のねらいをこうまとめている。「我が国におけるクレオール論は、概念、想像界におけるアイデンティティ論や新しい文学的想像力のかたちとしてクレオールを紹介し、受容する傾向がいまでも強いと思う。換言すれば、予示、可能態、想像力としてのクレオールが盛んに論じられる一方で、それが引き起こした、あるいはこれから引き起こすであろう、歴史の変動、政治の改変、表象芸術の炸裂を、具体的な事例に立ち帰って吟味する仕事はまだ比較的蓄積が薄いと思われるのである。要するに、『クレオールのかたち』にはまだまだこれから明らかにされる余地が残されている。」（13頁）すなわち、クレオールを「具体的な事例に立ち帰って吟味する仕事」の一端が、この10章で示された成果というわけである。

もちろん、本書の執筆者たちは、本書によって「クレオールのかたち」の全貌を示そうとしたわけでもなければ、本書で取り上げられたテーマ自体、予め設定された基準にそって取捨選択されたものではなく、個々の執筆者の問題関心を反映したものであるとされている。したがって、その評価も、「カリブ」という地域と「クレオール」というテーマからどのような問題群を浮かび上がらせることができるか、その問題群の輪郭に焦点をあてるべきであろう。

この観点に立つと、評者には、ある意味でクレオールをめぐる正統的な文学創造・文芸批評の問題を取り上げた、第IV部「クレオールへの回帰」よりも、クレオールという社会的現実が歴史や政治を読み解く論理に再考を迫るさまを検討した第I部「クレオールの現場」や、カリブを舞台に生み出されたクレオール論の射程を論じた第II部「外延としてのクレオール」および第III部「俯瞰されるクレオール」にいつそう興味を惹かれた。第IV部には、「作品としてのクレオール」の消費、詩語としてのクレオール語、エコフェミニズムといった刺激的なテーマが並んでいるのであるが、ここでは第I部から第III部までの7章を対象とすることをお許し願いたい。

編者の一人、遠藤泰生氏の指摘を待つまでもなく、クレオールはまさに多義的な概念であって、時代や地域によってもさまざまな意味で用いられる。また、社会的現実もしくは社会・文化現象としてのクレオールと、そうした現象から何らかの意味を引き出そうとする、クレオールをめぐる議論とを区別することも重要である。本書を通読すると、カリブ地域の特性としてクレオールが語られるとき、異種混淆性と新しいアイデンティティ創造という2つの要素をめぐって、論者の間に若干の比重の違いを感じる。

## 2. 別の原理としてのクレオール

第1部の2章は、いずれも国民国家の編成原理を相対化する論理をクレオールの中に見出し出す試みである。

遠藤泰生氏の論考は、「異民族、異文化との共生を創造するには実のところどうすればよいのか」(26頁)という問題意識から出発する。多民族・多人種社会として形成された南北アメリカ各地において、植民地からの独立後、「多からなる一」や「多くの民族からなる一つの国民」といった言説が国民統合のために作り出されたが、ラテンアメリカやカリブ地域については、しばしばそうした言説そのものが現実と混同され、人種・民族対立を解決する処方箋として内外で宣伝されてきた。異種混濁(「混血」)による同質的国民形成も、一つのクレオールのかたちであろうが、ここで遠藤氏が取り上げるのは、ジャマイカの中で「植民地時代以来、他の大多数のアフリカ系住民とはまったく異なる関係を植民地および独立ジャマイカ政府と有してきた」(26頁)逃亡奴隷集団、マルーンである。

マルーンは、18世紀の2回の「戦争」を通して、植民地政府との間に平和協定を結び、奴隷制社会の中で、ときには同じアフリカ出身の奴隷たちとも敵対しながら、独自の共同体を維持してきたとされる。しかも、その一部は、反乱を理由に父祖の地であるアフリカにまで送還されながら、地元住民との間に同胞意識を抱かず、「新規の入植者」としての生活を築いてゆく。そして、独立後のジャマイカにおいても、独自の統治組織と司法権をもつ、「ある種の国家内国家」を保持してきたという。では、こうした「独自の分離主義」を実践するマルーンが、なぜ「異民族、異文化の共生」の手がかりになるのだろうか。

遠藤氏によれば、そもそも現代カリブにおいて唱えられている「異民族、異文化の共生」は、アフリカ系、ヨーロッパ系、インド系、アジア系など、「きわめて大雑把な、大陸を単位に切り分けられた文化の共生」を意味する場合が多いのであって、その発想自体が、「地域—民族—文化—歴史を一揃い」と見る国民国家の原理と通底しているところに問題があるとされる。そして、マルーンを「白人支配へのレジスタンス」として、ジャマイカ黒人一般の中に解消してしまう考え方もまた、「単元的な集団の理解」として退ける。遠藤氏は、こうした「単元的な集団の理解」の例として、アフリカ中心主義にそのもっとも先鋭なかたちで表れた、アメリカ合衆国の多文化主義を想定しているが、マルーンがもつ、アフリカという起源に還ることによってではなく、「歴史の経緯、プロセス」から「アイデンティティを改変」する能力、言い換えれば共同性を創造する別の論理に「同質を前提としない共同性」を創造する可能性を見るのである。

遠藤氏の関心は、先にあげたクレオールの2つの要素のうち、新しいアイデンティティ創造に比重がおかれているようであるが、クレオールをめぐるジャマイカ社会の共同性(アイデンティティ)の重層性というか、パラドックスにも重要な意味があるように思われる。プランテーション地帯から遠く離れた山岳部に隠れ住み、「アフリカ性」を維持していたと考えられていたマルーンは、実はアフリカの多様な民族の混成であり、異種混濁を通して「この地」において共同性を形成したという意味で、立派なクレオールであった。しかし、このクレオールは、アフリカという「共通の起源」を梃子に差異を解消して一つのジャマイカ国民を創り出そうとする、独立後の支配的クレオール言説からは異端視される。ここからは、現実のジャマイカの政治・社会の中で、起源に基づく共同性とプロセス

に基づく共同性が並存している様子が窺われると同時に、異なる原理に基づくこれら2つの種類の共同性は、どのようにすれば平和裡に共存できるのかという疑問が湧く。

阿部小涼氏が取り上げた、「政治的ステイタス」をめぐる住民投票で、「どれでもない」という回答を突きつけたプエルトリコの人々の意識がわれわれの目に「曖昧」と映るとすれば、それもまた国民国家の編成原理の強靱さゆえのことであろう。1998年、プエルトリコでは、アメリカ合衆国との関係について住民投票が行われた結果、「連邦州」や「独立」や現状維持の「自由連合州」など、提示された4つのステイタス以外の、「どれでもない」という選択肢が過半数を制した。スペインによる支配に始まり、現在のアメリカ合衆国の「自由連合州」にいたるまで、いく重にも折り重なった植民地状況の中で21世紀を目前にしたプエルトリコの人々は、さまざまな政治的思惑を背景としつつも、近代が用意した国際秩序のいずれのカテゴリーをも、あえて選択しなかったのである。

阿部氏の論考で注目されるのは、1980年代以降、植民地状況を脱しようとする民族自決運動が、「民族意識、アイデンティティについての論争」と不可分の関係の中で進行してきたとの指摘である。プエルトリコとアメリカ合衆国本土との間の人的移動が常態化し、ニューヨークなどに巨大なプエルトリコ人コミュニティが形成されるようになった現在、「プエルトリコ」を構成する空間は人々が移動するあらゆる場所にまで拡大した。それとともに、脱植民地化の戦略もきわめて多様なものとなったのである。

ここからは、「どれでもない」という一見曖昧で消去法的な選択肢に、今はまだ的確な表現すら存在しない、それらの戦略が包含されていることが推察される。さまざまな名付けができそうで、しかし的確な表現が見当たらないこと、これもまたクレオール現在のカタチなのであろう。

### 3. 「カリブ」の広がり

カリブ地域の「外延部」を取り上げた第Ⅱ部の3章は、今や研究領域として特権化された感すらあるカリブ地域の空間概念や、そこで展開されてきたクレオール論の射程を確認するという意味で、これまた非常に興味深い。異種混濁と絶え間ないアイデンティティの変容を特徴とする社会・文化現象がクレオールであるとすれば、それ自体はいずれの社会・文化にも発見されるものであろう。そこで肝腎なのは、クレオールという現象の有無そのものではなく、どのような歴史的・社会的・政治的背景の下でそれがクレオールとして意識されるのかという問題や、クレオールが論じられる個別の文脈に注意を払うことである。

カリブ地域と異なり、多くの先住民が生き残った南アメリカ各地では、クレオールをめぐる問題も自ずと別の様相を帯びることになる。しかも、木村秀雄氏が取り上げたボリビアの熱帯低地では、カリブ地域のクレオールにとって決定的とも言える重要性をもつ、大規模な奴隷制プランテーションは展開されなかった。そこでは、イエズス会をはじめとするキリスト教宣教師たちによる「魂の征服」が、布教村（ミシオン）の建設を通して進められたのである。

キリスト教の布教によって先住民の宗教意識がどのように変容するのか、また土着化によってキリスト教自体がどのような変化を被るのかもまた、クレオール研究ではしばしば検討されるテーマであるが、ここでの木村氏の関心は、布教によって新たな民族集団が形

成される過程に向けられている点が独創的である。氏によれば、現在ボリビア東部低地における有力な先住民集団「チキタノ」は、17世紀末から18世紀半ばにかけて、イエズス会が異なる言語を話す先住民諸集団を布教村に集住させ、キリスト教とともに共通語として先住民言語の一つ「チキト語」を広めたことに起源を発する、「作られた民族集団」であるという。そして、現在では、「ひとつの民族としての意識を保持している」(107頁)とされる。

木村氏は、チキタノが一つの「民族」となる過程については分からないことが多いものの、「現在の民族アイデンティティ」が「長い歴史の中で醸成されてきたものである」と指摘している(108頁)。この点に関しては、さらなる研究の積み重ねが必要であるが、民族意識としてのチキタノの存在が確認されたのが、ボリビア東部低地ではじめて先住民センサスが行われた、1994年という比較的新しい時代であったことが気にかかる。1990年代は、ボリビアに限らず南アメリカ各地で先住民や黒人の運動が大きく盛り上がった時期であり、そのような運動の中で展開された、アイデンティティをめぐる議論との関係を知りたいところである。

ペルー黒人を取り上げたアルバレス氏の論考は、二つの点で重要である。一つは、ペルーにおける黒人文化の影響を示したこと、もう一つは、ペルー国民をめぐる異民族・異人種混淆の言説における黒人の除外を明らかにしたことである。

ペルーでは、植民地時代以来、太平洋岸でのサトウキビ・プランテーションを中心にアフリカ人奴隷が輸入された。しかしながら、ペルー内外でのペルー国民および国民文化のイメージは、「スペイン人と先住民との混淆」というもので、そこには黒人の存在は意識されていない。その理由について、氏は具体的な説明を加えていないが、異種混淆の発生とその解釈をめぐる権力関係の存在を予想させる。かつて多かった黒人は、長い混淆の過程を経て混血国民の中に「消えてしまった」とする、黒人性抹消の言説は、メキシコや中米諸国などにも見られることをつけ加えておこう。

アルバレス氏は、これまでペルー国民文化の中で無視ないし軽視されてきた黒人文化の影響を提示されているが、そこには「アフロ・ペルー文化」の復権を求める意志が窺われる。その意味で、「黒人」として一括りにされることを拒絶するマルーンを取り上げた第I部の遠藤氏の論考とは対照的である。おかれた政治的文脈によって「黒人性」の意味が変わることとともに、クレオール文化の多義性を示す好例である。

高橋均氏の論考は、クレオール文化と現代の主流文化であるグローバル消費文化との相互関係を、ブラジルや中米などラテンアメリカの諸都市で検証している。この論考の舞台はカリブ地域の「外延」であるが、内容から見るとまさに「クレオールの現場」を扱ったものであるとも言える。

多くのラテンアメリカ諸国では、しばしば国民や国民文化は異種混淆の産物として表象される。しかしながら、高橋氏が指摘する通り、そうした「クレオールの民衆文化」とは別に、支配階層の主流文化が厳然と存在しており、歴史上、両者は「絶え間のない接触と相互作用のうちに発達してきた」。現代においてそれを象徴するのが、ミドルクラスの消費文化の場である巨大なショッピング・モールや高級アパートであり、これらは頑丈な鉄柵と武装したガードマンによって、都市貧民の生活空間から隔離されている。ここから氏は、グローバル資本主義が進展する中で、クレオール混淆文化が「日々の現実」において

「冬の時代」を経過しつつあると結論づけている。

この指摘は、理念としてのクレオールと現実としてのクレオールとの距離を示唆していて興味深い。しかも、その距離は、グローバル資本主義というきわめて今日的な文脈の中で、ここ当分は縮まりそうにないという見解も首肯できる。ここでもまた、クレオールを取り囲む権力構造や階級構造が問題となるのである。

これに関連し、異種混濁性が論じられてきた文脈が、カリブ地域と大陸部のラテンアメリカ、とりわけカリブ地域と同様にアフリカ系人の影響が濃厚なブラジルとでは大きく異なることを痛感させられる。1930年代以降、ジルベルト・フレイレなどによって展開され、一種のオフィシャル・ストーリーともなったブラジルの混血社会論は、国民文化形成という課題を自明の前提としていた。それゆえ、そこで主張された異種混濁性が、白人主体の支配文化のヘゲモニーの下で、国民国家の論理に「回収」されてしまうのは自然の成り行きであった。かつて、イギリス出身のブラジルの人類学者ピーター・フライは、奴隷制社会で生まれた、豆と臓物を用いた同じごった煮でありながら、アメリカ合衆国のソウルフードが「エスニック料理」のまま留まったのとは対照的に、ブラジルのフェイジョアードが「国民的料理」となったことを例に、ブラジルとアメリカ合衆国における支配文化とアフリカ系文化との関係をめぐる相違を指摘した。さて、フランスやイギリスの植民地であったカリブ地域では、この種の料理はどのように位置づけられているのであろうか。

#### 4. メトロポリスの変容

かつてエリック・ウィリアムズは、『コロンブスからカストロまで—カリブ海域史、1492-1969』（岩波書店、1978年）において、カリブ地域の歴史が単なる「知られざる辺境の歴史」などではなく、西洋近代と不可分の関係にあることを示した。川北稔氏は、このウィリアムズの作品について、「このカリブ海こそは、コロンブスからカストロに至るまでの現代の世界史を鮮やかに映す鏡であった」と評すると同時に、このような問題意識が日本の研究者の間でほとんど共有されていない現状を嘆かれたものであった（同書、II、307-310頁）。

クレオールへの関心の高まりは、いささかでもこうした状況を変えるのに貢献したのであろうか。第Ⅲ部の2章は、こうした期待に十分応えてくれる力作である。

とりわけ、食人言説を取り上げた足立信彦氏の論考は出色である。足立氏は冒頭で、1810年にドイツの雑誌に紹介された、オランダ領ギアナを訪れたあるイギリス人男性の体験記の一節を引用する。それは、奴隷市場に連れてこられた黒人少年が、「白人が自分たちを売買するのは、食べるためだと信じているから」沈み込んでいるのだと話したというエピソードである。ここからは、「見知らぬことが相互的である以上、疑いもまた相互的に生ずるはずである」(180頁) という意味が引き出せるであろうが、当然のことながら、当時の読者は、白人にかけられた「食人の嫌疑」は、ただちに解くことができる黒人の「誤解」として受け取り、そこにこの文章の面白さを感じたのであった。

このように、足立氏は、15世紀末に本格的に始まる、アメリカ、アフリカ、アジアにおけるヨーロッパ人と現地住民との接触が、「相互性の抑圧」の方向に進み、ヨーロッパ人（白人）を常に「見る者」（主体）へ、現地住民を「見られる者」（客体）へと一方的に

固定したことを、説得力をもって示している。そして、このような「相互性の抑圧」は、やがて「科学」によって証明される人種主義へとつながってゆく。メトロポリスは相対性の可能性を開く方向には変容しなかったのである。

カリブ地域を語りながら、「結局はヨーロッパを語る」ことになるという足立氏の分析はここで終わる。しかし、人種主義は改めて「新世界」へと伝播し、そこに土着化するという第2幕が待っていた。アルバレス氏の論考にあるとおり、独立後のラテンアメリカ各国は、国民や国民文化から黒人性を拭い去ることに躍起となり、やがて20世紀に入ると人種混淆という、国民や国民文化を別のかたちで人種的に特徴づけようとする考え方を生み出し、人種主義を克服したという幻想に浸るのである。

一方、増田一夫氏は、言説としてのクレオール性を取り上げ、フランス普遍主義に対する批判の有効性を論じる。氏はまず、「忘却による和解」を要請するフランス普遍主義と「あらゆる背景世界を追い払う」というクレオール普遍主義は、「個人の持つ特殊性を一種の引き算によって還元し、ひとたび差異を希薄化した場に共生の空間を創設する」(225頁)という意味で一致することを確認する。そのうえで、フランス普遍主義が現実の政策として機能してきたことを考慮すると、それが要請する忘却とは、権力自らが振った暴力を忘却させることに他ならず、既存の支配構造の温存を図る論理であることに注意を促す。これに対し、フランス普遍主義が忘却を迫る、奴隷制や植民地主義という過去を原体験とするクレオール普遍主義には、「優れた発見的機能」があると主張するのである。

足立氏の言う「相互性の抑圧」が、奴隷制や植民地主義を正当化する人種主義の論理を生み出したとすれば、奴隷制や植民地主義は、増田氏の言うような言説としてのクレオールを生み出すことになった。言説としてのクレオールが突きつける「フランス普遍主義の陥穽」を前に、メトロポリスはどのような変容を遂げることができるのか、グローバル資本主義の時代を迎えた今、われわれはこのことを問われている。

## おわりに

本書を通読して改めて感じるのは、クレオールの多義性である。本書の中だけでも、クレオールはさまざまなかたちを見せるとともに、同じかたちでも異なる文脈ではその意味を変える。「カリブ地域」という空間概念もまた、同様に多義的であり、伸縮自在な広がりを持つ。カリブの地域性は、個々の島々や植民地のローカルな特殊性としてだけ捉えられてはならないのであって、「発見・征服」を契機につながれたヨーロッパ、アフリカ、アメリカからなる大西洋世界全体にまで広がっている。

クレオールをカリブ地域の問題として論じると同時に、クレオールが提起する問題群をカリブ地域に閉じ込めないという、「クレオール」と「カリブ」の取り合わせへの接近方法は、専門分野を異にする研究者たちの、まさに異種混淆の視点によってその可能性が明らかになった。著者たちが意図した地域文化研究の第一歩は、いま踏み出された。